

## フランチャ・スピリット 邊境開拓精神とアメリカ文學

村 尾 穂 積

「アメリカに於ける文學は三百餘年の歴史を持つが、アメリカ文學が開花したのはつい昨日のことである」と或る批評家が言つたが、事實アメリカ文學が世界文學の中に確乎たる地方を占める様になつたのは、今世紀に入つてからである。即ちアメリカ文學は、最初に英國の植民地文學として出發したのであるが、當時の文學は全くイギリス文學の模倣であり、未だ固有の文學を持つには至らなかつた。文學史家によれば、植民地時代の約百五十年間は歴史體乃至日記體の記録文學を有したに過ぎなかつた。

斯くの如くアメリカ文學は、他の國々の文學に比較すると實に新しい若い文學であり、神話もなければ民間の傳承文學もない。中世紀的封建的社會の影響もなく、全く近代的社会の中に發生し生長した文學である。アメリカ文學の考察に於て、我々は特にこの點に注目しなければならない。

アメリカ文學の苗床はニュー・イングランドである。アメリカ史によれば、アメリカへの最始の移民は、一六二〇年有名なビルグリム・ファザーズ一行のプリマス上陸によつて開始された。尤もこれより先一六〇七年に、樞部ヴァージニア州のジェイムスタウンに移民が上陸してゐるが、我々の當面の主題に大きな影響をもつものはプリマス上陸の北部移民である。これ等の移民の開拓し定住したニュー・イングランドは、アメリカ文化發祥の地であり、ボストンは當時の文化の中心地であり又文學活動の中樞でもあつた。

當時のニュー・イングランドの社會は、所謂神政貴族社會であつた。その社會の大部分はピュニリタンであり、彼等は神の國を地上に實現せんとする熱情と理想とをいだいて、新大陸に渡航してきたのであつた。彼等のいだける所謂ピュニリタニズムの精神は、後説する、フランチャ・スピリットと共に、アメリカ精神形成の二大要素であり、従つてアメリカ文學に與へた影響は殆んどはかり知ることが出来ない程である。アメリカに於ける清教精神(ピュニリタニズム)は、前述せし如く、プリマスに上陸せるピリグリム・ファザーズの精神に基くものであるが、元來ピュニリタニズムは、彼の有名なウイクリフやチンダル等の宗教革新運動の精神を承けて、英國に於て發展してきたものである。その主張する所は人間の靈と、其の救主との間に如何なる人間的行動の介在をも許さず、人は聖書を研究することによつて、直接神意に接することが出来ると主張した。従つて王や法王や僧侶には何等の權威を認めず、聖書こそ唯一最大の權威であり、各人は聖書を研究する權利を有し、聖書を通じてのみ人々は神に近づくことが出来ると考へた。

ピュニリタニズムは所謂新教の一派であるが、英國に於てはヘンリー八世の時代に、當時横暴を極めたローマ法王の握つてゐた宗教上の支配を脱して國立教會を設立し、國王自ら宗教上の支配權を握るに至つた。かくして國王は教會の首長となり、教會は密接に國家に結びつき國家の統制をうけることとなり、國民はひとしく國教を信ずることを強要された。英國國教は、ピュニリタニズムと共に新教にぞくするものであるが、その本質は非常にカトリック的な所が多い。第一に階級制度を有し、又その儀式はピュニリタニズムや他の新教諸派とは異なり、カトリック的な華美莊嚴さを持つてゐる。即ち英國國教は、外見上はローマ舊教より獨立した如くに見えるが、その教義の本質に於ては甚だカトリック的色彩が強く、ヘンリー八世及びエリザベス女王の宗教改革は眞の宗教的情熱より行はれた改革でなく、世俗的國家的動機より行はれた改革に過ぎなかつた。従つてピュニリタニズムの

一派は、この改革にはあきたらず英國教會内のカトリック的殘滓を清算せんことを求め、ローマ舊教に反抗すると共に、信仰の自由を主張して英國教會に入ることを拒否し、國王の宗教的專制に反抗した。

英國に於けるピニールリタンはかくして歴代の國王の迫害をうけ、メアリ女王の時に遂にその大多數は難を避けて海外に脱走し瑞西に避難した。そこでかの有名なカルビンの影響をうけ、彼等の信奉せるピニールリタニズムはこの神學的内容に於て、甚しくカルビニズムに接近した。アメリカに渡航したピルグリム・ファーザーズの信仰せるピニールリタニズムは、このカルビニズムの洗禮をうけたものであり、我々はカルビニズムの根本原理・根本特質を明らかにすることによつて、アメリカ・ピニールリタニズムの本質を理解することが出来るのである。又これによつて當時のニュー・イングランド社會の人々の宗教觀・倫理觀或は又政治觀を知ることが出来るのである。

カルヴィニズムの最も著しき特質は其の豫定説である。そしてその中には原罪説・定罰説・選擇説が含まれてゐる。即カルビンに依ると、凡ゆる人間の運命は凡る行動と共に、宇宙創造の神から豫め定められてゐる。さうして人間は始祖アダム、イヴが禁斷の智慧の果を食つて以來、生れながらにして原罪なるものを持つて必ず罰せられるのである。唯神が豫めその中の若干を選擇して救ひたまふのであつて、選擇されない者は如何に努力するも、如何に功業を積むとも未來永劫救はれる途はないと説く。

即彼にあつては、人間は意志の自由をもたづ、人間は極めて邪惡なものであり、人間が救はれるのはその善行によらず全く神の恩寵によるとし、人間は神の榮光のためにのみこの世に生活してゐるのであると考へる。それ故人々は日常生活に於ては常に自己の魂を含味し、隠れたる罪を見出しては懺悔によつてそれを贖はんとする禁慾的な生活態度を守ることとなる。かゝる態度は文學の立場より考へる時、決してその成長を助けるものではなかつた。カルビンに於ては神は義の神權能の神であり、愛よりも義が貴いのであるから信者は神の意志をこの世

に行ふこと、即奉仕に依つて救ひの神に對する義務を果さなくてはならぬ。それ故に家業を上げ、社會を清め國家を向上せしめなくてはならぬ。さうして神によつて救はれる者のあかしを立てねばならぬ。それ故彼等は勞働を貴び勞働を神聖視し、文學とか藝術の如きものを輕視する傾向があつた。當時のピューリタンの書物に對する態度、ひいては文學に對する態度は、代表的な清教徒とも云ふべきコトン・マザーの「すべて歴史を讀むに際しては時折適當に讀む手を休めて、それぞれの事件に榮光の神の御手がいかに働いてゐるかを考へよ」と云ふ言葉によつてもうかがひ知ることが出来る。彼等にとつては、文學とか藝術の如き審美的な方面は全然問題ではなく、ひたすら神の榮光のために勞働にはげみ、禁慾生活によつて身を潔白に保ち權能の神のいかりにふれざる様にとめた。

従つて當時のアメリカには、我々の考へる様な文學は固より望むべくもなく、僅かに宗教的文學・歴史の記録・日記及び若干の詩が見られるばかりである。前記のコトン・マザーの「ニュー・イングランド教會史」及び「見えざる世界の不思議」等は當代の代表的著作であり、又ウィルズワースの「審判の日」と題する千八百行の長詩は、當時の所謂ベストセラーであり、これを見ても當代のアメリカ文學が如何に貧弱であつたかを知ることが出来る。

アメリカに於けるピューリタニズムは、上述せし如く聖書を唯一の信仰の標準とし、聖書の教權は理性によつて證明せらるべしと考へ人間の理智を重んじた。従つて、ニュー・イングランドのピューリタン達は、理智を磨くことを非常に重大視し、この爲に教育に對しては特に熱心であり、アメリカ最初の大學ハアヴァード大學は、彼等の上陸後僅か十六年にして建設された。昔ギリシャのスパルタの母は我が子に向つて「勝つて楯を持つて歸れ、然らざれば死して楯に乗つて歸れ」とさとしたが、ピューリタンの母は我が子に「神が汝を立派なキリスト

教信者と立派な學者としたまふならば、母はその他に汝に要めることはない」と訓へ諭したさうである。これを見ても彼等が如何に理智を尊長したかが分る。かくの如きビュリタニズムの理智尊長の傾向は、益々教育を發展普及せしめ、今日のアメリカ教育の隆盛をもたらし又その文化の長足の進歩を招來したのである。

ビュリタニズムの根本原理の一つである上記豫定説の中に含まれてゐる厭人的・厭世的・消極的傾向は、他日時代の推移と共に樂天的・積極的・現世的傾向に發展し、ヤンキーニズムと共にアメリカ資本主義の發達に貢獻したのであるが、これはビュリタニズムそのものの中に内包されてゐた理智尊重の精神の當然の結果であつた。ビュリタニズムはかくしてその内包せる異分子によつて、内部的に變化を餘議なくされ、又外的にはこれから述べんとする所謂フランチャ・スピリットに依つて重大なる影響を受けることとなるのである。筆者はこの小論文の前後に於てアメリカ精神形成の二大要素としてビュリタニズム及びフランチャ・スピリットをあげたが、こゝにアメリカに於けるフランチャ及びその精神について一言したいと思ふ。

抑、フランチャと言ふ英語は、英國に於ては國と國との境界線と云ふ意味であるが、アメリカに於ては今まで誰も人の行つたことのない人跡未踏の土地、未開拓の邊境を指して云ふのである。換言すれば、開拓地と未開拓地との接觸線、即文明社會と野蠻社會との接觸線を云ふのである。このフランチャは固定的なものではなく、開拓の進むにつれてたへず移動し變動するものである。アメリカの歴史は邊境の歴史であると云はれる程であるが、邊境地の有する歴史的意義は歴史家ターナによつて最初に指摘された所である。筆者はこゝにフランチャ及びそこに於て養成された精神、即フランチャ・スピリットのアメリカ文學に與へたる影響について考察して見たい。

歐州より移任してきた移民達は其の風想も、凡俗も、習慣も、凡てヨーロッパ風であつたが、彼等はアメリカ

の大自然を開拓して西進するにつれて、彼等が最初に征服した自然が反對に彼等を征服したのである。彼等はその生活に於てその思想に於て、全くヨーロッパ的なるものより脱出し、そこに眞にアメリカ的なるものが生れたのである。ターナーは其の著書の中に於て次の如く言つてゐる。

「荒野は植民者を支配する。植民當時の彼は、衣服も生産業も機械器具も旅行法も思想もみんな歐州風であつた。然るに荒野は彼を汽車から下ろして樺製の輕舟に乘らしめる。それから彼に文明の衣を脱がしめ、獵衣を着アメリカ土人の革靴をはかしめる、チエロキーやイロコイスのやうなアメリカ土人等の丸太小屋に住まはせ、防禦用に身邊にアメリカ土人の作る様な柵を廻らしめる。やがて彼は玉蜀黍を植え、先の尖つた棒で耕作する様になる。——要するに境邊地に於ては環境が最初には人に強過ぎるが、彼は其の環境が提供する條件を甘受しなくてはならない。さもなければ亡びなくてはならない。そこで彼は土人の開墾地にも入り、土人の踏み分けた道をも歩むのである。さうして少し宛徐々に荒野を開拓して行く。けれども其の結果は古い歐州ではない——こゝにはアメリカ獨特の新しい物が生ずるのである。——此の様に於て、邊境地の發展は、歐州の影響を確實に脱することとなり、アメリカ獨特の獨立が確實に發展することを意味する。そこでこの發展や此等の事情の下に發展した人々やそれから生ずる政治的・經濟的・社會的結果を研究することは、やがて我々の歴史の眞にアメリカ的な部分を研究することとなるのである」

かくの如く、邊境地こそはアメリカをしてヨーロッパ文化より脱皮せしめて、アメリカ固有の文化を生み出さしめ、且つそれを生長發展せしめた温床となつた。ビルグリム・フアーザーズ一行が始めて新大陸に上陸した時には、アメリカ全土がフランチアであつた。彼等は大自然の猛威や、兇惡な土人と戦ひながら、開拓の歩を進めて行つた。それは誠に筆舌につくしがたき苦難の生活であつた。かゝる邊境の開拓のうちに逞しい邊境魂が養はれ

たのである。

ヨーロッパ諸國よりのアメリカ大陸への移民は、ビルグリム・ファーズの渡船以來、年と共に増加の一路を辿つて行つた。これ等の移民は夫々宗教的及び經濟的自由を求めて新大陸に移住したのであつた。アメリカの廣大なる土地はヨーロッパの農民にとつては大きな魅力であつた。フランチャの開拓には多くの勞働力を必要とするのでこれ等の移民は歓迎され、ロンドンには移民會社まで設立されて大規模の移民が行はれた。アメリカに於ける邊境地は、彼等によつて着々と開拓され十七世紀の終りには大體アリゲニー山脈に至るまで開拓線は移動した。昨日の原野は今日は田畑と變り、寒村は町と化した。自然の富源は次々と發見され農業について商工業が興隆するに至り、彼等の豫期以上の物質的經濟的成巧は彼等をして樂天的人世觀をいだかしめる様になつた。而してこれまで支配的な勢力を持つてゐたニュー・イングランドのピューリタニズムは、邊境が西進するにつれてその權威を失ふに至つた。

邊境に於ては凡ての人が平等であり、自由である。人は過去の傳統や特權を捨て、全くの原始時代に歸る。而も邊境の開拓には只管個人の力、個人の努力に頼らなくてはならないので、其處には自ら個人の尊長、個人の獨立、個人の自由が存するのである。フランチャ・スピリットはかゝる所に生れるのである。それは決斷・忍耐・獨立・適應性・個人主義及び樂天主義等をその特質として持つのである。

邊境の開拓はフランチャ・スピリットを推進力として西へ西へと進んで行くのであるが、英國國王は移民の西漸運動を餘りよろこばず、一七六三年には國王布告を出してアリゲニー山脈以西に進出することを禁止した。これは西部邊境地方を未開拓のままに残し、土人との交易に依つて莫大な利益を得んとし、又植民地が遠く西部に擴大することに依つて、國王の威令の及ばざらん事を恐れたためであつた。併しほうはいたる西漸運動の氣運は、

一片の法令のよく阻止する所ではなかつた。彼等移民はアリゲネー山脈の西方彼方に横はる無限の沃野を目指して奔流の如く押寄せたのであつた。

彼等がアリゲネー山脈を越へて所謂西部地方に進出した事は、アメリカに於ては歴史的な重大性を持つのである。即ちアメリカ大陸はアリゲネー山脈を境界として、截然と二つの地方に分たれたのである。大西洋岸よりアリゲネーに至る「東部」と、アリゲネーよりロッキーマウンテンに至る「西部」とは舊世界に對する新世界のその如く、互に對照的な存在であつた。東部社會は一言にして云ふと、英國的な社會であつた。政治上宗教上の制度、風俗、習慣、言語凡て英國風であつた。社會の支配階級は大地主、豪商及び教會の長老等にして、決して今日謂ふ所の民主的なものでなく、貴族的非民主的社會であつた。之に反して西部の社會は自由と平等との支離する民主的な社會であつた。アメリカの眞にアメリカ的な地方は、正に西部地方であつたのである。我々はこゝに於てエマソンの有名な言葉を想記するのである。即ち「歐洲はアリゲネー山脈にまで擴がつてゐる。アメリカは其の山脈の彼方にある」と。

抑々「西部」なる言葉は、時代と共にその意味を變じた。植民地時代の初期に於ては西部はアリゲネー山脈の東麓に沿ふ邊境地を意味した。然るに後にはアリゲネー以西の地を意味することゝなつた。即ち西部は邊境の開拓と共にたへず西に移動する一つの地方であり、一つの社會であつた。故に邊境の開拓の行はれる間は常に西部地方は存在したのである。この西部地方に於ては民衆化の強く行かれる地方であり、アメリカのデモクラシーは西部に生れ、從つてアメリカ獨特の文化を生み出した地方である。邊境は西部を生み西部は東部に反映して、遂にアメリカ全社會をして邊境の民主的感化力の下に立たしめたと云ふ事實は、アメリカ史上刮目すべき事柄である。



アメリカの固有の文化が西部に生れた如く、アメリカ獨特の新しい文學も亦西部に生れた。植民地時代のアメリカ文學はイギリス文學の亞流であり、模倣であつた。嚴密に云ふ所のアメリカ文學の發生は、獨立戦争（一七七六年）によつてイギリスの支離を脱した後に始まるのである。併し政治的獨立は必しも思想的獨立を意味するものではなく、獨立後に於てもアメリカは思想的にはイギリスの植民地的存在であつた。彼等は依然としてイギリス文化を尊長し、崇拜する所謂コロニアル・コンプレックスに落入つてゐた。十九世紀に入り國家が安定し産業は發達し、貿易は進展するにつれてアメリカの國運は隆盛を見るに至つて、文學に於てもブライアント、クーパー、アーヴィングの如き錚々たる作家を輩出し、彼等についてエマースン、ロングフェロウ、ホーソンの如き文人、詩人を生んだが、彼等の作物は依然植民地文學の域を脱することは出来なかつた。彼等のうち最もアメリカ的と云はれたアーヴィングやクーパーにしても、自國の人事風物を作中に多く取入れた丈であつて、その精神に於てはイギリス文化の影響を多分にうけ、彼等とイギリス作家との間には確然たる差異は認められないのである。

エマースンは十九世紀の大思想家の一人である。彼は獨立自尊のアリメカ主義を説き、その著「アメリカの學徒」はアメリカの知的獨立宣言書と稱せられるのであるが、彼の趣味趣向及びその文章用語は、アメリカのカイライルと呼ばれる程イギリス的であつた。かくの如くアメリカは獨立戦争によつて獨立國家とはなつたものの、政治上の分離は直ちに文化の分離をもたらずには至らなかつた。アメリカの文學者にとつて最高の榮譽は、イギリスに於て稱讚を博することであつた。丁度ロンドンがニューヨークの財界を支配したように、イギリスの批評壇はアメリカの文壇を指導し、アメリカの文學者はイギリスに於て認められなければ一流の文學者には成り得ないと云ふ實情であつた。

かゝるイギリス文化の支配に反抗し、新しい独自のアメリカ文學を創造せんとする運動は、新聞雜誌によつて獨立戦争後たへず唱へられた。一七八六年にドワイト師は「イギリス文學に描かれた生活は、アメリカの現實生活とは甚だしく異なるが故に、今日のアメリカ文學者は須らく眼を轉じてインスピレーションを自國に求むべきである」と呼んだ。かゝる氣運の中に「西部」に於て逞しいフランチャ・スピリットの洗禮をうけた一群の文學者が現はれた。即マーク・トウエイン、ホイットマンを中心とする所謂西部文學者のグループである。彼等の出現によつてアメリカ文學は茲に新しいスタートを切つたのである。

ホイットマンは詩に於て、マーク・トウエインは散文に於て眞のアメリカ國民文學を創造したのである。ホイットマンは西部のフランチャ・スピリットを言ひ表はした最初の詩人である。

彼は一八五五年に草の葉 (Leaves of Grass) と云ふ詩集を始めて出したが、その中の「先驅者オウ 先驅者」(Pioneers O Pioneers) なる詩に於て彼は邊境精神を次の如く歌つてゐる。

先驅者！ オウ 先驅者

さあ、わが日に焼けた顔の子供等よ

順々について來い、武器を用意して、

ピストルを持つてゐるか、

鋭い刃の斧を持つてゐるか、

先驅者！ オウ 先驅者！

吾々は此處にぐづ／＼してはゐられなう、

吾々は進まなくてはならぬ、吾が愛兒共よ、

吾々は危険の衝に當らなくてはならない。

吾々、若い屈強な者共、

他の者はみんな吾々に頼るのだ、

先驅者！ オウ 先驅者！

世界中の脈といふ脈が落ち合つて、

吾々の爲に鼓動する。

西の方へと動きながら、

單獨でか或は合動してか着々と前に進む、

みんな吾々のために

先驅者！ オウ 先驅者！

嗚呼、西部の娘達よ！

嗚呼、妹娘又は姉娘よ、母よ、妻よ！

離れくゝとならないで

吾々も一緒に進まなくてはならない。

先驅者！ オウ 先驅者！

この詩はホイットマンが邊境精神を一つの詩形に表現したのであるが、彼の用ひたこの詩形は所謂自由詩形と  
た呼ばれるものであつて、既にミルトンやドライデンの時代に使用されてゐたのであるが、この形式のもつ特長的  
な効果を遺憾なく作品の中に生かしたのはホイットマンを以てこう矢とする。この詩形は從來の作詩法を無視し

無韻の自由詩であつて、彼はこの詩形を馳使して、或は自我をうたひ、或は靈肉の一致を高唱し、或は自由平等を讃美したもので、内容的にも形式的にも凡ゆる束縛からぬけ出した新しい境地をひらき、詩壇の革命的な存在となつた。だから彼の詩には優雅典麗の美と云ふ様なものはないけれども、潑刺とした生命力にあふれ廣濶爽快な氣にみち眞晝の太陽のやうな洋々たる感銘をあたへるものである。

ホイットマンがことさらに新しい詩形を用ひたのは、別に新奇なものを追ひ求めまた在來の韻律法をむやみに破る外に欲求にもとづくものではなくて、彼の心の中に湧き起る詩想を出来るだけ自然のままに、出来るだけ効果的に表現しようとする内的な欲求によるものである。即彼の強烈な個性から生ずる情熱は、在來の韻をふんだ詩形では表現しきれなくなり、種々苦心の結果彼獨自のリズムと行とをもつた詩形——即、詩想の流動につれて情緒の高低緩急に應じて律動と節奏とが變化して行く——自由詩形即ち内在律を用ひたのである。

併し彼の詩は時代の人達には理解されなかつた。彼の最初の詩集「草の葉」が出版された時、世評はすこぶる悪く、毀殺され又罵倒された。彼の詩はただ短い散文の行をかへて羅列したもので、詩でもなんでもないと評し又元來彼は敦養も品性もない泥くさい野人で、本格的な詩が書けず、脚韻も律格を無視した奇妙な詩を作つて世人の意表にいで、淺薄な新らしがり屋の喝采を博したものであると誹謗した。ところが一方では彼の詩を熱愛し太陽の如く欽仰讚美する人々もなかなか多い。併しこの様な讚否の對立はホイットマンの如きつよい個性と獨自な傾向と色彩をもつた詩人には有勝なところである。

次にマーク・トウェーン (Mark Twain) について一言するに、彼の一生はフランチャ・スピリットが十九世紀後半になつて、如何に變化するに至つたかを示す好い實例である。マーク・トウェーンと云ふのは實は筆名であつて、彼の本名は Samuel L. Clemens と云ふのである。彼の筆名は、彼が青年時代にミシシッピ河で水先衆

内をしてゐた時に水夫が水の深さを量る際に "By the mark Twain" (標による二尋) と云つたのを思出してつげだのである。

彼の事についてのべる前にその時代を一べつとして見たい。彼の生れたのは一八三五年であつて、我國に於ては福澤諭吉の生れた年である。そして彼の死んだのは一九一〇年である。彼の時代はアメリカ史上に一時期を劃する特色のある時代であつた。史家は此の時代を「金ヅカ時代」(the Gilded Age) と呼ぶのであるが、當時のフランチアは既に太平洋の波浪の押寄せるカルフォルニア州まで延びてゐて、特に一八四八年に金鉱が発見されて以來、ロッキーマウンテンを越えて、雪崩の様に無数の人々が押寄せた。當時のアメリカ人は宛かも物につかれた如く、一かく千金の夢をいだいて西部の邊境へ金銀を求めてさまよひ出たのであつた。黄金が凡ての價値の標準であり「富致」と云ふ事はアメリカ人に取つては單なる物質的所有以上の或物を意味し、富を蓄積することが人間の神聖なる義務とさへ考へられた。財産を有することは即ち勤勉と先見の明ある證據であり、これを有せざる事は怠惰不徳の致す所であり、道徳的な此の世に於て徳と不徳とが同一の酬を受けるなど云ふ事はあり得べからざることであると考へた。アメリカは此の時代に於て、邊境開拓の時代より産業化の時代を経て機械時代に進んだのである。アメリカ人は上は大統領より下は一介の田夫野人に至るまで、凡てがビジネスマンたるを以て得々とし、國を擧げて個人の福利増進と天然資源の開發に専心したのであつた。

この時代精神を代表する二人の人を我々はこゝに思ひ出すのである。一人はグラント將軍であり他の一人はジエークスである。グラント將軍は今云ふまでもなく南北戦争に於ける北軍の司令官である。この戦争は奴隷廢止が中心となり、それにからまる經濟問題から起つた内亂であるが、この戦に於て北部が勝利を占めグラント將軍は非常な尊敬とすばらしい人望を一身にあつめた。彼は意志強く精力絶倫にして戰略にたけ、よく北軍をし

て勝利に導いたのであるが、彼は元來は一介の野人であり、軍人としてはすぐれてゐたが、政治家としては全く素人であつた。グラントはリンカンの死後四年にして大統領に選ばれ、その任期を二回續けた後三度目の候補になつたが、これは失敗に終つた。彼の大統領たりし八年間は、アメリカ史上に於て最も重大な轉換期に相當してゐた。アメリカは奔馬の如く資本主義的繁榮への道をまっしぐらに突き進んだ。特に北西部の躍進は、南部のそれとは全く對照的なものであつた。一八六二年の「家産法」(Homestead Act)に依つて、無價で土地が割譲されることとなり、太平洋横斷鐵道の建設と相俟つて、膨大な海外移民を招くこととなつた。更に次々に發見される鉱山の魅力が之に拍車をかけた。人口の西漸は、國內閉鎖に伴ふ工場自體をも西漸させることになる。そこにあらはれる著しい特徴は鐵道など大規模企業の獨占化の傾向と自由労働者の激増であつた。國民の富の大部分は少數新興産業資本家の手に握られ、物質至上主義的な考へ方が生れた。政治道徳は腐敗し、生活様式のすべてにわたつて自己の富を誇示する風潮が著しく、建築、繪畫、彫刻などもただきらびやかなものが好まれて、露骨な趣味の低俗さが見られた。グラント將軍もこの所謂「金びか時代」の一代代表的人物となつてしまつた。彼は山と積まれた利権を圍んで政界人、金權階級との會食で、全く自己を見失つてしまつた。

この金權階級の代表的人物がジェイ・クックである。彼はアメリカ最初の大銀行經營者である。彼は南北戦争の經濟を賄つた人で、一八六一年即南北戦争勃發の年にフィラデルフィアに銀行を經營する様になつたが、軍事公債募集と太平洋横斷鐵道敷設の事業とに關連して、莫大な産をなし又シンデケートをつくり、ヨーロッパにまで進出してたちまちにして財界の王者となり、その豪華華麗な生活は王候をしのぐものがあつた。併しその後普佛戦争が起つた時、彼は機を見ることを誤り一朝にして互解してしまつたが、今日尙 *as rich as Jay Cook*, と云ふ言葉はアメリカ人の耳に残ることとなつた。彼は利権を獲得し、私利を追求するためには手段を選ばず、

グラント將軍には五万ドルの邸宅を提供したのみならず、要路の政治家、軍人に贈賄を行つて何等恥する所がなかつた。而も彼個人としては、品行方正の好紳士であつた。

儲マーク・トエーンはかゝる時代に立身した。彼はミツスリー州のフロリダに生れた「邊境人」の子である。彼の父は法律家であつたが、商賣に手を出し死ぬ時には約十方エーカーの土地を持つてゐたと云はれる。父は當時の人が凡てそうであつた如く、いつかは巨万の富を得るであらうと夢想しながら死んで行つた。

マーク・トエーンは最初土地の印刷工場の職工となり、後故郷を出てニューヨーク、フィラデルフィア、シンシナティなど轉々とし、三十二歳の時ミシッピ河の水先案内となつた。この時南北戦争が勃發した。彼は最初義勇兵として南軍に加つたがしばらくして北軍に居た兄のすゝめに従つて、兄の任地であるカリフォルニア沿岸のニヴァーダに行つた。當時は所謂「黄金熱」(Gold Fever)がアメリカ國民を胃し、無数の人々が西部邊境地に金鑛を求めて殺到した。マーク・トウエーンも亦金鑛發見の夢をいだいてカリフォルニア州の東方に行き、連日鑛床を漁つて山又山を彷徨した。

そのうちサンフランシスコの新聞社に呼ばれてジャーナリストになつた。一八六七年彼は「キャラエラス郡の有名な跳び蛙」("The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County")と云ふユーモラスな短篇物を著した。これは彼が鑛夫から聞いた話であるが、それは高跳びを教込んであつた一匹の蛙が、相手の蛙の持主に鐵砲玉を飲まされたために大事な賭で主人に損をさせると云ふ筋である。この話は當時のニュー・ヨーク市民を狂喜せしめたと云はれ、新聞雜誌はこぞつて之を轉載し、更に外國語まで翻譯され、彼の名前は蛙以上に一躍して有名になつた。彼はこれに自信を得て次々と作品を發表したが、そのうち特に有名なのは「膝栗毛外遊記」(The Innocent Abroad)、「トム・ソーヤーの冒険」(The Adventures of Tom Sawyer)、「リットン・ムーアの冒険」(The Innocent Abroad)、「トム・ソーヤーの冒険」(The Adventures of Tom Sawyer)、「リットン・ムーアの冒険」(The Innocent Abroad)

〈The Adventures of Huckleberry Finn〉「金ひか時代」(The Gilded Age) 「皇子と王女」(The Prince and The Pauper) 「ジャンダーク」(Personal Recollection of Joan of Arc) 「パドメ・ウインソン」(Pudd'n-head Wilson) 等がある。

「アメリカを知らんと欲せばマーク・トウエインを讀め」と云ふ事はよく聞かぬ事であるが、彼の作品には近代アメリカの社會相が多く描かれ、一種の社會側面史としても興味が深いのである。併し彼の作品には作家として必要な創作力を欠き、只單に自己の豊富な經驗を挿話風に取扱つただけであるとの非難があるが、世界のユ・モア文學に新生面を開きトム・ソーヤアやハックルベリ・フィンの如き不朽の人物を後世に残しただけでも作家としての價値は十二分にあると思ふ。

彼は所謂西部文學者のグループに屬する。彼等の特長はヨーロッパに對する侮蔑であり反逆である。The Innocents Abroad の中にはホイットマンの詩歌に於けると同様に、偶像破壊の精神がひそんでゐる。ホイットマンとマーク・トウエインの二人は眞のアメリカ的觀照とイデオロギ―を以て自國を描いた點に於て、近代アメリカ文學の特異の存在と云ふ事が出来る。彼等の精神は西部邊境の生物であり、ヨーロッパ的なものより完全に脱皮した眞のアメリカン・デモクラシーの精神である。

以上筆者はフランチャ・スピリットのアメリカ文學に與へたる影響の一斑を考察してきた次第であるが、アメリカ文化の創造に於て邊境精神が如何に大なる役割を果したか、又果しつゝあるかについて讀者諸君の注目と關心を喚起されんことを希望する次第である。